

ももちゃん、作家になる
初稿



20261007



エリー



目次

01 じこしょうかい	1
02 おまもり	2
03 パオ	3
04 ふれあい	4
05 どうにもこうにも	6
06 やっぱりサリーちゃん！	8

01 じこしょうかい

わたし、ももちゃん。ぬいぐるみのうさぎなの。ピンクいろで、たおるのぬので、ふわふわなんだよ。

ももこねえちゃんもいっしょなの。

もちぬしはサリーちゃん。3さいのときにであって、20ねんいじょういっしょなの。

わたしとももこねえちゃんでおせわしているの。

エリーかあさんやねこまるばあちゃんもいてにぎやかなの。

サリーちゃんにあいされて、つくもがみになったわたしは、ひらがなをおぼえた。カタカナも。

そしてえにっきをかくようになったの。

いつか、エリーかあさんみたいにしょうせつをかいてみたい！

そのゆめをいま、かなえる！

みんな、わたしのかいたおはなし、よんでね！

02 おまもり

サリーちゃんはいま、すぐくおおきなまちにいるの。
エリーかあさんやねこまるばあちゃんとはなれてひとりぐらし。
わたしたちがしっかりしないとちこくしちゃう！
きょうも、おきなわにいくのに、ぜんぜんおきない。
ぼったをびよーんとおもちみたいにのばしてもだめ。
さいごのしゅだん。とびげりあたっく！
やっとおきた。ぼったばたでくこうへむかったよ。
でもでも、でんしゃのなかで、おまもりをわすれたことに気づいたの。
がってん、まかせて。
わたしがとりにもどったの。
でもあれれ？
おまもりをもつとどうめいになれない！
サリーちゃんのところにとんでいけない！！
おまもりをおいて、サリーちゃんのところにつけたら、でんしゃがゆれて、サリー
ちゃんがてすりにごちんこ。
わたしがおまもりをおいてきたから。わたしのせいだ。
くやんでいると、ももこねえちゃんがついてきてくれたよ。
おまもりをもったぬいぐるみのわたしが、そらたかくまいあがってくこうへいそぐ。

03 パオ

さっ。さささささっ。

ぬいぐるみがあるいてたらホラーになっちゃう。

ももこねえちゃんのそうじゅうで、スーツケースにかくれていどうしたよ。

でもサリーちゃんのひこうきがわかんない。

こまっていたら、とおくでキラリとひかったよ。

そそそっとちかづくと、ビニールポーチにはいったあみぐるみのぞうだった。みずいろのおおきなおみみとながいはな。そしてスポンをかたひもでつっている。

おしゃれでピカピカ。まるでしんぴん！

なのになんだか、さびしそう。

「やあ、ぼくはパオ。きみたち、つくもがみになれたんだね。なのにどうしてワタのからだできたの？」

わたりにパオ！

「サリーちゃんがおまもりわすれたの！」

いきおいよくへんじするわたしのよこで、ももこねえちゃんがれいせいにせつめいする。

「おまもりをもつと、なぜかとうめいになれなくて……あの、パオさんはおきなわにくのですか？」

わらいながらパオはいった。

「パオでいいよ。ぼくとくればおきなわにつくよ。となりにおいでよ！」

わたしはパオにちかづいた。

「うん！」

「いもうとをよろしくおねがいします」

とうめいなすがたのももこねえちゃんがペコリとおじぎをすると、サリーちゃんのもとへとびさった。

こんどこそ、わたしがおまもりをぜったいにとどける！

04 ふれあい

わたしとパオはひこうきのかもつしつにはこぼれた。
パオのポーチがついたリュックがうまらないように、わたしはひっしでつみあげつづけた。

そして、かもつしつのドアがしまり、まっくらになった。
するとかなしそうにパオがぼつりとつぶやいた。

「ももちゃんはサリーちゃんにあいされてていいな。ぼくはさわってももらえない」
そんなかなしいことがあるの！
わたしは、パオのポーチのファスナーをジジジとひらきた。
そしてパオのみみにそっとふれた。いがいとかため。

「みみ、おおきいね」
「うん、なんだか、はずかしいや」
「ふふ」
パオはじぶんのはなしをしてくれた。

「ぼくはもちぬしのかのじょのてづくりなんだ。かのじょのことはすきなのに、どうしてぼくにはさわろうとしないんだろう？」
めいたんてい、ももちゃん、あらわる。
きらん！
「かのじょにさわっているみたいではずかしいから？」
「えー、ぼくはぼくだよー」
それはそうだ。
なぞはふかまる。
かんがえふけてゆだんしてたら、パオがわたしのみみをさわってきた。

「ふわふわだね」
レディーのみみにいきなりふれられて、ぷんぷんしそうになったけど、さきにさわったのはわたしだった。ゆるす。

「いつもひとりだから、ももちゃんといっしょでうれしいな。ずっといられたらいいのに」
それはゆるせない。
わたしはすぐにこたえた。
「パオのことはすきだけど、わたしのいちばんはサリーちゃんなの。ごめんね」
「そっかあ」
こえがさびしそう。
パオもつくもがみになれたら、あそびにこれるのに。でも、さわってもらえないんじゃない.....むりか。

ㄱㄱㄱ。

05 どうにもこうにも

わたしは、ひこうきのかもつしつからレーンにのってはおぼれた。
パオのもちぬしが、リュックにしがみついているわたしをみた。
ドキンドキンドキン。
どうする？
もちぬしは、リュックのくちをひらくと、だまってわたしをおしこんだ。
うぎゅぎゅぎゅぎゅ。
リュックのすきまからのぞきみると、とてもおおきなたてものがいっぱいならんで
いた。
なんだろう？
ベッドとつくえといすしかないせまいへやについた。
リュックからわたしをだすと、パオをポーチのままつくえにおいた。
そしてでていってしまった。
「ね。さわらないでしょ？」
「ほんとだ。かわいそう」
おももりをもったからだはおもくて、あるくのもひとくろう。
でもてをはなしたら、サリーちゃんにわるいことがおきるかもしれない。
でもでもサリーちゃんのこえも、ももこねえちゃんのこえもきこえない。いばしょも
わからない。
どうしたらいいの？
あいたいよ！！
「うわあああん」
ごうきゅうするわたしに、パオがやさしくささやいた。
「ぼくがいるよ。ぼくじゃだめなの？」
だめなの！
サリーちゃんのももちゃんなの！
ガチャ。
そのとき、パオのもちぬしがかえってきた。
てにかみをもっている。
パオのまえでひろげた！
「じえいたいしょうしんしけんにごうかくしたよ。パオがみまもっていてくれたおかげ
だ。いつもありがとう！」
それだけいうと、てれくさそうに、へやをでていった。
わたしは、びっくりしてとじたとびらをみつめていた。

「みて！」

ふりかえるとパオがあみぐるみのからだからぬけだし、とうめいになっていた。

「つくもがみになったのね！」

よろこぶわたしに、パオがあわてていった。

「はなにつまって！」

パオがまどをあけた。

「ももちゃんをよぶこえがする」

「きっとももこねえちゃんだ！」

わたしは、おまもりのひもをしっかりとみぎてにもった。そしてくるんとまるめたパオのはなにりょううでをまきつけた。

パオはみみをはばたかせて、ものすごいスピードで、うみのうえをとびさった。

するとしまかげで、ももこねえちゃんがあわあわしている。

すいちゅうをのぞくと、スキューバダイビングをしているサリーちゃんがいる。さんそマスクがはずれてくるしそう。

わたしは、みぎてのおまもりを、いきおいよくすいちゅうになげこんだ。

つぎのしゅんかん、サリーちゃんがひかりにつつまれて、かいすいがわれ、マスクをつけることができた。

そのちよくご、ひかりはきえ、サリーちゃんのまわりにかいすいがもどった。

「やった。やりとげたよ！」

あんしんするとどうじに、わたしのワタのからだか、うみにドボンとおちた。

なみにゆられて、ぶかぶかとながされていった。

06 やっぱりサリーちゃん！

ざばーん！

サリーちゃんが、かいめんにあがってきた。そして、わたしがじぶんのからだをひろいあげるよりさきに、だきあげてくれた。

やっぱりサリーちゃん！

すき！

ちゅっ。

サリーちゃんとももこねえちゃんよろこびあっていると、パオがもじもじおりてきた。

「あの……ぼくはパオ」

「たすけてくれてありがとう。いつでも、とうめいになってあそびにきてね」

パオ、ふあんそう。

「ほんと？」

「ほんとだよ」

パアッとかかるくなる。

「わーい」

わたしとパオとももこねえちゃんは、うれしくてうみのうえをとびまわったよ。

おきなわからサリーちゃんがかえるまえに、パオのもちぬしがなにをしているか、こっそりにいったよ。

そのあいだ、サリーちゃんは、ぬれたわたしをあらってかわかしてくれたの。

つちのうえで、パオのもちぬしは、ほふくぜんしんしたり、はしりこんだりしている。

じゅうのていれまで！

とてもとてもきびしいくんれんに、わたしはびっくり。

パオはほこらしそう。

つくもがみでも、いちどいったばしょしかとべないから、おきなわからかえるひ、パオがとうめいになってついてきたよ。

いえについたら、たれれおやこがでむかえてくれたよ。

ほかにもたくさんのぬいぐるみに、パオはびっくり！

もうさびしくないね！

「あ、よくあらったのに、まだパオのけがついている。あみぐるみって、さわるとわしゃわしゃになっちゃうんだよね」

それだ！

「だからさわってくれなかったのか。なんだ。そっか」

よかったね。パオ！

ももちゃん、作家になる 初稿 20261007

著 者 ELYE

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
